

【いま改めて『橋を架ける思想』を！】

<2016.2.28 記>

2.26 朝日に次の記事が載っていました。「中国内陸部の貴州省で、世界最大級の電波望遠鏡（口径 500メートル）が稼働するのを前に、約 1 万人が立ち退きを迫られることになった」。その望遠鏡で「地球外生命体の発見などで成果が期待されている」一方、立ち退きを迫られているのは周囲約 5 km 圏内に住む少数民族のようです。補償金（一人約 21 万円）のほか「経済的に困っている少数民族への上乗せなどもある」とのこと（※『理科年表 2015』では、単一アンテナ電波望遠鏡で 500m 超は 2 基だけ）。

電波のノイズ（雑信号）を抑えるため、口径の 10 倍の圏内に電化製品・携帯等を使用する人間の立入りを制限するのは“科学的に当然”ですが、普通に考えれば、そのために人間の居住していない土地をまず探すべきで、「適地」が無ければ断念するのは当たり前です。中国の少数民族政策や人権問題をさておいても、望遠鏡建設のため住民に移住を強いることに、(将来望遠鏡を利用する)科学者たちは何とも思わないのでしょうか。「科学の進歩のため（実際には研究者の名誉・研究費獲得+国威発揚のため？）にはやむを得ない」と考えるのでしょうか。少数民族（地球内生命体）は多数“発見”されているから、もはや目を向けなくていいというのでしょうか。

また、先日（2月中）のTV番組でも、ハワイ・マウナケア山頂域に日本が計画している天文台が、これ以上は増やさないとこの約束に反した「聖地」への建設ということで、地元住民から反対に遭っていることが紹介されていました。「科学の進歩」は決して“傍若無人”な行為に対する『免罪符』ではありません。もしも真摯な（お金をチラつかせない=利益誘導しない）話し合いで解決できないのであれば、「適地」が見つからなかったということで、建設を諦めるのが科学者としての公正な態度ではないのでしょうか（この問題は、まだ結論は出ていないと思いますが）。

原発再稼働も然り。都会には「安い電気」、地元には「経済振興・雇用確保」など、相変わらず様々な利益誘導（実際には電力会社の利益）ばかりですが、福島原発事故で明らかになったように、実際には 10 数万人もの住民が強制移住・自主避難を強いられ、250km 圏内の首都圏 3000 万人が移住・避難する事態に至った可能性もあるのが原発事故ですから、“最低”の中国・望遠鏡方式で、50km または 250km 圏内住民を立ち退かせた上で（避難計画では不十分！）再稼働すべきです。強制移住を実施できないなら、原発の「適地」はないということで、再稼働は諦めるべきです。

「ひとつの橋の建設がもしそこに働く人びとの意識を豊かにしないものならば、橋は建設されぬがよい…。橋は、空から降って湧くものであってはならない、…押し付けられるものであってはならない。そうではなくて、市民の筋肉と頭脳とから生まれるべきものだ。…市民は橋をわがものにせねばならない。」<フランツ・ファノン著作集 3 「地に呪われたる者」 pp. 113-114、みすず書房 1969>。（了）